



球磨郡深田村庄屋地区

高田 忠喜さん(59歳)

久さん(39歳)

博文くん(9歳)



太鼓が静かなブームを呼んでいるという。去年の9月、東京の国立劇場では、全国の太鼓を集めた祭典「第四十九回民俗芸能公演『日本の太鼓』」が開催された。その全国大会に熊本からも、由緒ある伝統芸能が出場した。球磨郡深田村庄屋の白太鼓踊りである。

「落ちゆく先は九州相良」と浄瑠璃「伊賀越中双六」にも歌われた球磨地方には、平家の落人伝説にまつわる白太鼓踊りが、各地に残っている。その中でも深田村のものは、最も特色ある代表的な踊りのひとつである。寿永の昔、壇の浦の合戦に敗れた残党が、この山の奥の秘境へと落ちの

び細々と暮らすようになったが、あまりにも変わり果てた身の不運を嘆き、華やかだった昔を偲びつ

# 伝説が生きる里。

## 庄屋の白太鼓踊り



つ神前で唄い踊ったのが、この白太鼓踊りであると言われる。

源平決戦を描くこの踊りは、頭や脇、関ら兵士たちの重なる踊りと、太鼓。そのあい間に打ち鳴らされる子どもたちの哀切を帯びた鉦。そして、仮想の敵、仮鬼たちの滑稽な踊りてくり広げられる。敵陣の偵察、出陣、合戦、凱旋とストーリーを追う一連の踊りは、全部で二時間もかかる長丁場の演技である。

深田村の白太鼓は、代々その家の長

男しか踊れない。つまり、この土地に生まれ育った生粋の庄屋っ子でなければ踊れない伝統ある踊りなのである。高田忠喜さん、久さん、博文くんも、代々続く踊り手のひと組である。

練習は、ふつうみんなの仕事が終わった夜8時から10時頃に行われる。長時間の踊りであるうえに、かぶとや太鼓はかなりの重量なので、大人たちにも普段のトレーニングは欠かせない。全国大会を控えた去年の夏には、博文くんも、久さんや忠喜さんの声援を受けながら、夏休み返上でがんばった。

厳しい練習とともに受け継がれた道具類にも、しっかりと年季が入っている。いま使っているかぶとは、百年以上もの歴史あるもの。何代もの村の男たちの汗が、このかぶとにしみている。

四方を九州山地に囲まれた、人吉盆地にある深田村。この静かな村に住む61世帯の小さな集落が、ひとつの保存会となってこの白太鼓踊りを受け継いできた。それは、昔も今も、ここに住む人々の誇りであり、人々の心を結ぶ大切な絆でもある。山々をバックに、地唄を唄う忠喜



さん。その唄に合わせて踊る久さんと博文くん。現在三代続いているのは高田さん親子だけだが、ほかにも、田山さん、上田さん、白柿さんなど、この村には親子の踊り手が、何組もある。村全体が、ひとつの文化財と言っているのかもしれない。勇壮だが、どこか切々たる哀愁を感じさせる不思議な魅力をもつこの踊り。歴史ある村の誇りを、これからも大切に守り続けてほしいと思う。

